はじめに

本講義は旧帝大をはじめとした難関国公立大学合格を目標とする講座です。

難関国公立大の現代文といえば

「記述のポイントがわからない」
「そもそも勉強して点数が上がるのか」

というものです。しかし、論理的構造分析を身につけ、論理のルールに従って真偽判定をしていけば、全ての問題に根拠をもって解答することができるのです。

「難関国公立大の現代文は難しい」

という常識を覆すのがこの講義です。

本講義を終えたとき

「周りがほとんどまともな対策をしない現代文こそ、差をつけることができる科目だ」

と思えるように講義をしていきます。

この秋、みなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

①　文法
②　構文
③　論理

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係か

らなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語─述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」や「傍線部」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして設問に解答してください。

秋期講習では「制限時間あり」で60％を目標として解答してください。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

映像授業を受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答を書く」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。**ただし、本文に線を引くのは構いません。**

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント　**復習ポイントを覚える。問題を解き直す。**

難関国公立大 現代文　目次

第一講……p.8
第二講……p.18
第三講……p.28
第四講……p.40

第一講　35分

次の文章は檜垣立哉『食べることの哲学』の一節である（設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある）。読んで設問に答えよ。

誰もが普段気づいていないことであるが、食べものというのは、ほとんどが「生きたもの」である。このいい方はいささかオブラートにくるんだものであり、実際には塩分やミネラルなどをのぞき、われわれは何かを殺して食べているのである。もちろん、ヴェジタリアンがおり、動物は食べるべきではないという主張がなされることもある。だが、その場合でも食べてもよいとされる植物もまた生物であることには変わりがない。また多くの食のタブーはこの「殺す」ということにこだわりをもっている。何をどういおうと、われわれは生き物を食べ、そのかぎりでそれを殺している。

とはいえ、よくおわかりのように、とりわけ近代社会においてはみだりに生き物を殺すことを1<u>スイショウ</u>する文化はほぼ存在しない（戦争という重大な例外事例はあるが、この点は措（お）いておく）。一方では生きているものを殺してはダメだというのは文化の基本的な原則でもある。だが同時にわ

れわれは日々自分が生きるなかで、大量の動物や、あるいは植物を、やはり殺して食べているのである。現代文明においてはまさに、みえないところでそうした殺戮（さつりく）はおこなわれる。これは[2]タンテキに矛盾ではないか。

すがすがしいまでに[A]この矛盾を問い詰めるのは宮沢賢治である。宮沢は法華経というきわめて戦闘的な仏教的信仰を背景にもちながら、この問題を小説や童話という仕方で書きつづけた。それは食物連鎖そのものを問う「よだかの星」、あるいは人間もまた食べられる自然であるということを喚起させてくれる「注文の多い料理店」や「なめとこ山の熊」などにおいて明示されていることである。人間は生き物を食べないと自分が死ぬ。しかし、自己の倫理に忠実であれば、そもそも自分が死ねばよいのではないか。宮沢の問いそのものはここにまで達してしまう。これは極限的な「食べない」に通じるものである。

そしてまたこの場合、「ここまでなら食べてよし」「これは食べてはいけない」という問いにむすびつくことも[3]オウオウにしてある。これもまた[B]文化相対主義が幅をきかせる議論のようにみえる。曰く、日本人は魚を生で食べるが、近年の「スシ」ブーム以前はそのようなことは世界のどこでもだいたい気持ち悪がられた。（注1）ムスリムは（注2）ハラルフードという特定の規則にのっとった殺し方をした食材しか食べない。インドでは牛は

聖なる生き物なので食べない、等々。だがこうした議論のそれぞれは、実際にはさして重要ではない。この議論には、あるゼロ点ともいうべき根底がある。それは「人間は人間を食べない」ということである。これはカニバリズムのタブーといわれる。カニバリズムの[4]キヒは、本当に人類に共通なのかという議論があるが、これが「食の下限」を規定していることは事実であろう。そしてそれがゆえに、むしろ人間が人間を食べるということは、さまざまな人類学のなかの（西洋中心的な）「野蛮人」の表象のなかにみうけられることになる。この点については、社会学者である雑賀恵子が、『エコ・ロゴス』（人文書院）という書物で大変[5]ケイハツ的な知見を提示してくれている。食べてよいものと食べてはいけないもの、これは通常は文化的なことと考えられるが、人間を食べることについてはきわめていりくんだ、薄暗い場面という状況にたちいたらなければならない。

　このことは食育にも連関する。大阪の豊能町でおこなわれた、殺して食べることを前提に豚を飼うという、実験的ないのちの授業の顚末(てんまつ)をまとめた『豚のPちゃんと32人の小学生』（ミネルヴァ書房）という本がある。この内容は、妻夫木聡主演で、『ブタがいた教室』という映画にもなっている。この試みは、教育学的にはさまざまな批判をうけるものだろうが、哲学的にみれば、文化と動物との人間としての臨界を、教育という視点か

らあつかうことにより（つまり文化のなかに押しこめようとして）、それが無理であることを露呈させてしまう貴重な実験であるようにみえる。

　率直にいえば、これは教育としてはとても褒（ほ）められたものではない。小学生たちは真剣にはなしあうものの、結末はいたって無責任であるからだ。だがそこでは、「無責任」であるからこの試みが悪いということにはおそらくはならない。食育や、食べるということをいかに道徳的にあつかったところで、そこには「生き物は生き物を食べる」という絶対的な仕組みが介入し、それについて教育は、ほぼ何もいえないということが明らかにされるのである。そこでの「無責任さ」はいわばどうしようもない「無責任さ」である。さて、ではどうすればよいのか。これこそが食にかんする哲学の大テーマではないのか。

　食にかかわる矛盾にまつわる問題系は、もちろん文化間での「食べてよいもの」「よくないもの」の対立にも展開できる。私は毎年和歌山県の紀伊勝浦に学生と合宿にいくことを習慣としているが、その途中に太地町という本当に小さな町がある。この何ということのない田舎の町は、(注3)シーシェパードや、それと関連する反捕鯨運動の強烈な攻撃対象になったことで一躍脚光を浴びた。『ザ・コーヴ』という、この土地での伝統的なイルカ漁を批判する映画はきわめて政治色の強いものであるが、その映像的価

値は、興味深いことに攻撃されている太地町のひとのあいだでも認められている部分がある。

こうした運動をどう考えるのか。人間同士の利害がおそらくいちばん対立する位相は、[C]こういう場面であるだろう。人間と食をめぐる事態は、確かにさまざまな禁止とそのせめぎあいのなかにある。ただしそれは単純な文化間差異の問題なのではない。むしろより複雑な人間と自然とのあいだに横たわる何かに触れるものではないか。

ここまでのはなしだとだいぶ陰鬱な印象をうけるかもしれない。確かにそうなのだが、一面こうしたタブーや暗さのうえに人間の味覚がある。それは残酷さをひきうけたかぎりでの、ある種の味覚の洗練なのかもしれない。この点については、原点にたちかえって（注4）レヴィ＝ストロースの（注5）料理の三角形から「人間にとって何が旨（うま）いのか」という問いをたててみたい。

レヴィ＝ストロースは、もともとは神話をあつかう人類学者であるが、料理に触れるときには神話と料理の相同性についてとりあげている。神話は、理解しがたい自然の事象に対し、それと人間の世界とを調停する手段であるとレヴィ＝ストロースはいう。現代において神話はたいてい[6]コウトウ無稽なものにみえるが、そこには明確な論理があり、自然の事象を文

化の事象で説明するためのひとつの調停であるとされるのである。そしてそれは、料理についても同じだという。

食べるものは、自然物である。料理とはこの自然物に何らかの人工的な加工をほどこすことにほかならない。この加工の様式は、「生のもの」「火にかけたもの」「腐敗させたもの」によって形成される「料理の三角形」として提示されるが、ここでは「腐敗させたもの」という特殊な領域をとりわけ強調したい。そこで「煮たもの」は「腐敗」という現象と強く連関する。腐敗させることとは、一見すると食を食でなくさせる行為であるかのようにみえるがそれは違う。腐敗は発酵とむすびつき、実に絶妙な人間の味覚そのものを可能にするのである。

発酵がなければ、味わい深い料理は存在しない。そして発酵というのは人間が手を加えるというよりも、ある期間それを自然のなかに放置することによって旨みをひき出すという D 自然と文化の接合点を示す現象である。納豆や味噌(みそ)や醤油(しょうゆ)、干物や保存食、そしてもちろんアルコール、これは人間の食の原点である。これを哲学的な主題として押さえることは、きわめて重要な意味をもつに違いない。人間は毒を食べるのである。あるいは嗜好(しこう)品の歴史を考えればこのテーゼはもっと 7 ロコツに示せるのかもしれない。さらにいえば現代における猛毒というのは、純粋精製した砂糖

を入手した近代人にとってのスイーツそのものであるのかもしれない。

注

1　ムスリム――神に帰依するものの意で、イスラム教徒を指す。

2　ハラルフード――イスラム教の律法に従って処理された食材・食品。

3　シーシェパード――激しい抗議活動で知られる国際的環境保護団体。

4　レヴィ＝ストロース（一九〇八～二〇〇九）――フランスの人類学者。構造主義人類学の創始者。

5　料理の三角形――レヴィ＝ストロースが『食卓作法の起源』で示した、「生のもの」と「火にかけたもの」と「腐ったもの」を頂点とする三角形の概念図。

問一　傍線部1～7のカタカナを漢字に改めよ。

問二　傍線部Ａ「この矛盾」とはどのような矛盾か。五〇字以内で説明せよ。

問三　傍線部Ｂ「文化相対主義が幅をきかせる」とあるが、どのようなことか。六〇字以内で説明せよ。

問四　傍線部Ｃ「こういう場面」とはどのような場面か。六〇字以内で説明せよ。

問五　傍線部Ｄ「自然と文化の接合点を示す現象」を料理に見いだすのはなぜか。本文全体の論旨を踏まえ、一〇〇字以内で説明せよ。

問一

1	5
2	6
3	7
4	

問二

問三

問四

問五

解答解説

第一講　解答

問一

1	推奨
2	端的
3	往々
4	忌避
5	啓発
6	荒唐
7	露骨

問二

現代文明では、不殺生を文化の基本的な原則とすると同時に、食用の動植物の殺戮が行われているという矛盾。

問三

どこまでなら「食べてよい」のか、または「食べてはいけない」のかという問いの答えは、各々の文化によって異なるということ。

問四

伝統的な食物を食べている文化と、それを批判する文化との間で、「食べてよいもの」と「よくないもの」の対立が生じている場面。

問五

理解しがたい自然の事象に対し、自然と人間の世界とを調停する手段である神話と同様に、料理も発酵というある期間自然のなかに放置することによって腐敗させ人間にとっての旨みを引き出すものを利用するから。